【科学研究費補助金基盤（A）プロジェクト】
バウッダコーシャの新展開：仏教用語の日英基準訳語集の構築
2017 年 7 月

Bauddhakośa Newsletter no. 6

❖ 目次

研究の概要と成果報告
研究の概要 …… 1
研究成果の中間報告 …… 2
本プロジェクトに携わる研究者 …… 2
活動報告
第 62 回 ICES シンポジウム IV「仏典翻訳の裏表—南北両伝の翻訳事情—」報告 …… 3
『『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語』公刊報告 …… 6
『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語』の出版を終えて …… 9
研究ノート
「翻訳チベット語文献の読み方—『仏随念注』を例として—」（堀内俊郎） …… 13
記事 …… 20

❖ 研究の概要と成果報告

研究の概要

バウッダコーシャ・プロジェクトは、2011–2015 年度に「仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集（バウッダコーシャ）の構築」（科学研究費補助金・基盤研究（S））により、５年間の研究を遂行してきた。

この間の活動と研究成果については、定期的にニューズレターを発刊するとともに、独自の HP（http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html）を開設して公表・発信している。2014 年 3 月には、本研究の中間成果として斎藤他編著『瑜伽行派の五位百法』（バウッダコーシャ II、山喜房佛書林）と榎本他編著『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語』（同 III、山喜房佛書林）の２冊を公刊した。

またこの間、2013 年 11 月に「仏教用語の淵瀬をこえて—バウッダコーシャの課題と展望—」（於東京大学山上会館）、2014 年 11 月には「仏教用語の今昔（いまむかし）—翻訳はいかにして可能か—」（於東京大学仏教青年会ホール）と題して、公開シンポジウムを開催し、多くの参加者との意見交換を行った。2014 年 5 月には、第 59 回国際東方学者会議（ICES）において「仏典翻訳論考—「すぐれた翻訳」をめぐって—」と題するシンポジウムを主宰し、関連するプロジェクトを推進する国内外の研究者を集め、それぞれの具体的な成果と課題を討議した。

科研代表者・斎藤 明

これまでの５カ年に及ぶ研究により、研究の基本的な方法を確立するとともに、定義的用例を抽出することが比較的容易な南北両伝の論書を基礎に用例集と基準訳語を構築

するという所期の目的はほぼ果たされた。しかしながら、以上に挙げたような研究活動をとおして、解決が図られるべき研究テーマとして、２つの研究課題に直面することになった。

その第１は、術語を直接に定義づけることが稀な経典、律典、および一部の論書とそれぞれの注釈文献における用例を精査し、適切な基準訳語を検討し提示するという課題である。

これとともに期待されるのが、英語による研究成果の公開・発信という第２の課題である。現在、斎藤研究班では、そのモデルケースとして、2011 年 1 月に公刊した「『倶舎論』を中心とした五位七十五法」（斎藤他編著、山喜房佛書林）を改訂しつつ、その英語版の作成に取り組んでいる。すでに草稿は完成し、当該の成果は 2017 年度末に刊行される運びとなっている。

研究成果の中間報告

今回のプロジェクト「バウッダコーシャの新展開—仏教用語の日英基準訳語集の構築—」（科学研究費補助金・基盤研究（A））は、2016–2018 年度の３年間の研究遂行と、その成果の公表が期待されている。

すでに計画初年度の 2016 年度末には、宮崎泉（代表）・横山剛・岡田英作・高務祐輝共編著の『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語』（バウッダコーシャ IV）（BIB 20）、ならびに室寺義仁（代表）・高務祐輝・岡田英作共編著の『『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二縁起項目語』（バウッダコーシャ V）（BIB 21）が、いずれも山喜房佛書林より公刊された。

一方また、先にふれた公開シンポジウム「仏教用語の今昔（いまむかし）—翻訳はいかにして可能か—」に設けられた、「prajñā/ paññā の訳語をめぐって」と題する特別シンポジウムでの発表を中心に、関連成果がとりまとめられ、2016 年度末に『仏教文化研究論集』18・19（東京大学仏教青年会）として、同じ表題をもつ特集号として刊行された。当該の特集号は、prajñā/ paññā の意味合いに焦点をあて、パーリ文献（河﨑豊）、説一切有部（一色大悟）、『菩薩地』（岡田英作）、瑜伽行派（高橋晃一）、バーヴィヴェーカ（斎藤明）、チャンドラキールティ（横山剛）、仏教論理学（石田尚敬）の７領域の文脈から、それぞれの専門研究者が執筆した。prajñā/ paññā の訳語をめぐっては、これらの論考をふまえ、あらためての議論と調整が期待されるところであるが、仏教学の広い視野からの考察は、今後の議論に向けて貴重な一石を投じることができたといえようか。

（研究代表者・斎藤 明）

本プロジェクトに携わる研究者

研究代表者

斎藤 明
（国際仏教学大学院大学・教授）
「総括＋インド大乗仏教論書」

研究分担者

榎本 文雄
（大阪大学大学院文学研究科・教授）
「パーリ仏教関連術語」

下田 正弘
（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）
「大乗仏教関連術語＋人文情報学関連情報の提供」

室寺 義仁
（滋賀医科大学・教授）
「初期瑜伽行唯識思想関連術語」

佐久間 秀範
（筑波大学大学院人文社会科学研究科・教授）
「インド・中国唯識思想関連術語」

宮崎 泉
（京都大学大学院文学研究科・教授）
「中観思想関連術語」

山部 能宜
（早稲田大学大学院文学研究科・教授）
「インド・中国禅思想関連術語」

種村 隆元
（大正大学仏教学部・准教授）

「インド・中国密教関連術語」
高橋 晃一
（東京大学大学院人文社会系研究科・准教授）
「瑜伽行唯識思想関連術語＋研究成果の Web 公開」
石田 尚敬
（愛知学院大学文学部・講師）
「仏教論理学関連術語」

連携研究者
Charles Muller（東京大学大学院人文社会系研究科・特任教授）
Dorji Wangchuk（Hamburg 大学・教授）
蓑輪 顕量（東京大学大学院人文社会系研究科・教授）
石井 公成（駒澤大学仏教学部・教授）
渡辺 章悟（東洋大学文学部・教授）
桜井 宗信（東北大学文学研究科・教授）
馬場 紀寿（東京大学東洋文化研究所・教授）
新作 慶明（武蔵野大学経済学部・講師）

研究協力者
Paul Harrison（Stanford 大学・教授）
Jonathan Silk（Leiden 大学・教授）
葉 少勇（北京大学・准教授）
何 歓歓（浙江大学・教授）
永崎 研宣（人文情報学研究所・所長）
苫米地 等流（人文情報学研究所・専任研究員）
堀内 俊郎（斎藤研究班）
一色 大悟（斎藤研究班）
崔 境眞（斎藤研究班）
清水 尚史（斎藤研究班）
王 俊淇（斎藤研究班）
楊 潔（斎藤研究班）
河崎 豊（榎本研究班）
名和 隆乾（榎本研究班）
古川 洋平（榎本研究班）
岡田 英作（室寺研究班）
高務 祐輝（室寺研究班）
横山 剛（宮崎研究班）
三代 舞（山部研究班）
真鍋 智裕（山部研究班）
佐々木 亮（山部研究班）
佐藤 晃（山部研究班）
林 慶仁（山部研究班）
野武 美弥子（山部研究班）
藤本 庸裕（山部研究班）
道元 大成（山部研究班）
倉西 憲一（種村研究班）
大塚 恵俊（種村研究班）
伊集院 栞（斎藤/種村研究班）

❖ 活動報告

第 62 回 ICES シンポジウム Ⅳ「仏典翻訳の裏表（うらおもて）—南北両伝の翻訳事情—」報告

2017.5.19（東方学会主催、於日本教育会館）　斎藤 明（国際仏教学大学院大学・教授）

仏教は、ブッダ・ゴータマ自身がそれぞれの土地のことばで教法（ダルマ）を広めることを推奨したという伝統もあって、さまざまな方言で、さらにはまた他の諸言語への翻訳をとおして伝承された。紀元前 5 世紀後半以降、ブッダが活躍したインド中部地方からインド諸地域へ、紀元前 3 世紀にはインドからスリランカへ、紀元後 1 世紀頃からはインドから西域を経て中国へ、紀元後 8 世紀後半以降は北インド（ネパールを含む）やカシミールを経てチベット地域に伝播した仏教は、多くの翻訳された仏典を生むとともに、それぞれの地域の諸言語で著された新たな諸仏典を誕生させた。

漢訳仏典や中国撰述の諸仏典は、朝鮮語、日本語、ベトナム語等への—広義の—翻訳がなされ、一方また、チベット語訳を基礎にモンゴル語訳仏典も生まれた。また、パーリ語聖典からはシンハラ語や東南アジア諸語への転写や—かなり時代が下ってからは—翻

訳も行われ、19 世紀以降には、サンスクリット語やパーリ語等のインド語から近代諸言語への翻訳も進められてきた。

このように、仏教は＜翻訳＞を一つの伝統的な特色としてもつ。とはいえ、スリランカから東南アジアに伝わった上座部系の仏教では、文字の異同をこえて、パーリ語聖典による伝承を重んじ、それぞれの土地の言語への翻訳は近代以降のことであった。これに対して、漢訳およびチベット語訳は、仏教史における二大翻訳ともいえる事業であり、その後の東アジアおよび内陸アジアの仏教伝承に多大な影響を与えることになった。

本シンポジウムは、以上のような背景を念頭に置き、インドにおける仏典の伝承、南方上座部におけるパーリ語聖典のもつ意味と近代の翻訳事情、漢訳およびチベット語訳それぞれの翻訳事情とその特色および背景を検証した上で、期待される仏典翻訳の近未来像を考察するために、斎藤明（国際仏教学大学院大学教授）と船山徹氏（京都大学教授）がコンヴィーナーとなって企画された。

はじめに司会の斎藤が、以上のような趣旨と進行の段取りを説明した。その上でまず斎藤明は、「仏典翻訳の今昔（いまむかし）—漢訳とチベット語訳をめぐって—」と題する発表を行った。

漢訳については第 1 に、鳩摩羅什(350–409)以前の古訳時代には、総じて訳文としての信頼度にくわえ、漢文として難点が小さくなかった。第 2 に、中国には仏教伝来以前に儒家や道家を中心とする諸子百家の伝統があり、それら—とくに老荘（道家）的諸概念—との思想的・文化的調和が求められた。第 3 にまた、翻訳者および訳場に参集した諸学僧の力量に与るところが大きく、翻訳の質に差異が著しい。羅什や玄奘に代表される優れた翻訳者が結果として訳語・訳文の模範例を提供することになった。

これに対して、チベット語訳は第 1 に、文字と文化受容の両面で、インド（一部は中国）との関連が深く、8 世紀末から、国家事業として組織的かつ集中的に翻訳作業を行い、インド人学者とチベット人訳経僧の共同作業を基本とした。第 2 の特色は、逐語的な意訳が多いという点である。漢訳では「仏」「菩薩」「涅槃」等の重要な術語はいずれも音写語を採用するのが一般的であるのに対して、チベット語訳の場合には、ブッダに対するサンギェー（sangs rgyas「目覚め・開かれた［方］」）の訳語に代表されるように意訳が中心で、音写語はむしろ稀である。第 3 に、チベット語訳にも翻訳者あるいはインド人学者の理解力や表現力等の差異により翻訳の質に相違は見られるが、比較的その幅は小さかった。翻訳方法の準則や訳語の統一を企図して『翻訳名義大集』や『同中集』（814 年）が作成され、一定の機能を果たした。斎藤は、以上のような特色を例証するため、玄奘が意訳せずに音訳するのが適当としたバガヴァット（「薄伽梵」等；チョン・デン・デー bcom ldan ’das）他の術語を取りあげて詳説した。

次に、船山徹氏は「漢訳の裏表—翻訳の背後に見えるもの」と題して発表を行った。氏はまず、翻訳の意義を論じ、翻訳は原典と合う・合わないという基準のみで評価されるものでなく、原典に頼らず漢訳のみを通して内容を伝えるという役割をもつこと、また、同一の原語に対して異なる訳語が当てられた事実と、時代による訳語の推移にも意を注ぐ必要があることを強調した。さらに氏は、漢訳の問題がときに不十分な綴文に帰因することが散見されるとして、具体例を挙げて論及した。

とくに氏は、前者の一例として、漢訳者が訳語に込めた意味の相違が関係する典型例として saṃvṛti（「世」「俗」「世俗」「隠顕」等）をとりあげ、インドおよび中国における同語の解釈の異同とともに、その背景にある思想史的な動態を理解する必要があることを例証した。

午後に入って、まず馬場紀寿氏（東京大学）が、「翻訳に抗して—上座部大寺派のパーリ正典言語論—」と題して、スリランカと東南アジア大陸部に広まった上座部大寺派の伝統のなかで、パーリ語が長期間翻訳されずに正典言語の地位を守ってきた事実とその背

景をめぐって考察した。この点は、北伝の説一切有部が伝承する仏典や、大乗経典の多くがサンスクリット化されていった事実に照らして、きわめて注目される。氏は、説一切有部のアーリヤ（聖）語論に言及した上で、上座部大寺派における「パーリ語主義」を詳説した。同派によれば、パーリ語は三蔵からなる仏説の伝承にふさわしい言語であり、仏陀が話した「マガダ語」にほかならないという。その立場から大寺派は、無畏山寺派や祇陀林寺派が受容したサンスクリット経典を非仏説として斥け、仏説は仏陀自らの言語であるパーリ語＝マガダ語のみによって学ばれるべきであるとした。このような伝統は東南アジア大陸部にも継承され、一部の語釈文献をのぞいて、三蔵全体を現地語に翻訳する作業は 20 世紀に入ってから開始されることになったという。

続いて、葉少勇氏（北京大学副教授）は「サンスクリットと漢訳の間に見えるもの—鳩摩羅什訳『中論』の事例研究—」（英文）と題して、有・無、ならびに有・無それぞれに関係する常住・断滅の二見をめぐるナーガールジュナと漢訳者である鳩摩羅什との微妙な差異を具体的な事例をあげて検証した。氏によれば、ナーガールジュナは有・無等の両極端を排除するのみで肯定的な立場を示さないとして、氏はこれを「否定的アプローチ」と呼ぶ。これに対して、無と定無、有と定有（/ 実有）とを区別し、第一義諦の観点から無と説く傍ら、世俗的の観点からは有であると説き、定無と定有の両極端を排除する形で中道を位置づけたのが「肯定的アプローチ」と氏が呼ぶ鳩摩羅什の立場で、その後の中国仏教思想に大きな影響を与えることになったという。

次に、吉水千鶴子氏（筑波大学）は、「チベット語訳による思想伝承の背景—翻訳と教育—」と題する詳細な発表をとおして、チベットにおける仏典翻訳の実情に迫った。チベット語への仏典翻訳がインド人学者とチベット人翻訳者によるチームワークを基本とすることは、チベット大蔵経所収の個々の翻訳文献の奥書が伝える。氏は『カダム派文集』や『蔵族史記集成』などの近年出版された新資料をもとに、後伝期（10〜13 世紀）、とくにチャンドラキールティの再発見と『中論釈明句論』他の著作の翻訳・紹介に大きな貢献をなしたパツァプ・ニマタク、ならびにその弟子シャンタンサクパの事例に焦点を当て、かれらがいかにテキストを学び、翻訳を行ったのか、またその際にインド人学者はいかなる役割をはたしたのかを詳説した。

最後に、Stefano Zacchetti 氏（オクスフォード大学教授）は、「中国中世初期の仏典翻訳を読む」（英文）と題して、3〜4 世紀の仏典翻訳の実例を検証し、最初期の翻訳事情を考察した。氏は、安世高訳（AD146）『仏説人本欲生経』に対する 4 世紀後半の道安註、ならびに同じ安世高訳『陰持入経』に対する著者不明の註釈（3 世紀）を取りあげ、最初期の漢訳、すなわち蘊・界・処に相当する「陰」「本持」「入」等の古訳時代の訳語とその意味を、関連するパーリ語や後代の漢訳例等と照合しながら、具体的に検証した。

以上の総計六つの発表に関しては、それぞれの発表の後に短時間ながら発表内容に直接関係する質疑応答を行った。

すべての発表を終えた後に、船山徹氏がそれぞれの発表に対する詳細なコメントを寄せ、各発表者は必要に応じて回答、あるいは補足説明を行った。さらに、その後三十分余り、参会者からの質問をも交えて、シンポジウムの全体テーマおよび個別の発表をめ

第 62 回国際東方学者会議 シンポジウム IV 会場の様子

ぐって活発な討議を行った。本シンポジウムは、「バウッダコーシャの新展開—仏教用語の日英基準訳語集の構築—」（研究代表者・斎藤明）と題する科学研究費補助金・基盤研究（A）によるこれまでの成果の一端を公開し、関連する諸問題を討議するという目的を併せもつものであった。七十名余りの参会者を得て、最新の研究成果をめぐって活発で有意義な質疑応答を行うことができ、実り多いシンポジウムになったように思う。

『『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語』公刊報告

室寺 義仁（滋賀医科大学・教授）

バウッダコーシャ・シリーズの第 V 巻として、この度、『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語と題する研究成果を公刊することができました。本書は、初期瑜伽行派の根本典籍『瑜伽師地論』（*Yogācārabhūmi*）における仏教用語に関して、定義的用例と見做される記述箇所を抽出し、吟味された現代訳語を提示することを目指した共同研究成果の一部です。定義的用例に基づく仏教用語の現代基準訳語検討の試みは、斎藤明教授を研究代表者とする、所謂バウッダコーシャ・プロジェクトにおいて推進されて来ました。これまでに、『倶舎論』を中心とした五位七十五法、瑜伽行派の五位百法、パーリ文献の五位七十五法対応語を扱った研究成果が公刊されています。仏教用語の現代訳語を問い直すことの意義と重要性については、既に、本研究プロジェクトの既刊シリーズ、『『倶舎論』を中心とした五位七十五法の定義的用例集』(斎藤他、2011 年)、並びに、『ブッダゴーサの著作に至るパーリ文献の五位七十五法対応語』（榎本他、2014 年）それぞれの巻頭において的確に論じられています。平成 19 年度から始まったこの流れの中で、平成 23 年度から室寺が連携研究者の一人として参画する機会を得たことに続いて、「インド瑜伽行派関連術語の調査・検討」という研究課題の許で、研究分担者の一員として、高務祐輝、岡田英作の両君を研究協力者に迎えることができ、平成 25 年度からは室寺研究班としての活動を遂行してきました。

さて、本書が調査・検討の対象とする『瑜伽師地論』は、インド大乗仏教二大学派の一翼を担う瑜伽行派の諸文献の中で最も古く、同学派の教義が展開する上での起点となっているという点で非常に重要です。初期瑜伽行派における仏教用語の理解事情を明らかにするためには外すことができない論書です。しかし、その中核にあたる古層部の「本地分」に関して、残念ながら、文献学的研究の土台とも言えるサンスクリット校訂テキストが未だ出揃っていない状況にあります。一定の範囲を扱って公刊されてきた各校訂本も、1950〜70 年代に出版された比較的古いものについては、およそ半世紀に亘る瑜伽行派研究の蓄積を経た現在から見るならば、当時の時代的制約に起因する誤りや不備が指摘されるようになって来ました。近年、こうした事情を背景にして、例えば、大正大学の声聞地研究会によって、『瑜伽師地論』「声聞地」に対する再校訂作業を踏まえての翻訳研究が順次公表されています。しかしながら、本書で中心的に扱う『瑜伽師地論』第一「五識身相応地」、第二「意地」、第三〜五「有尋有伺等三地」の既刊校訂本（Bhattacharya ed., 1957 年．以下、YBh と略記）に関して言えば、しばしばテキスト上の問題が指摘されて来たにも関わらず、全面的な再校訂は未だに果たされていないのが実情です。実際のところ、既刊校訂本が出版されてから半世紀以上を経た現在に至るまで、当該箇所を本格的に取り扱う文献研究がほとんど見られないのは、こうした文献学的理由に因るところが大き

いと思われます。そこで、我々研究班は、本研究課題を遂行するに当たり、基礎となるサンスクリット・テキストの問題を放置したままで、用語の現代訳語の検討のみを積み重ねることに就き、可能な限りこれを避けたいとの思いが強く、現存する単一写本に基づき、サンスクリット原文を検討することから始め、必要に応じて既刊校訂本に訂正を加えるという基礎的研究作業から取り組むことにしました。この点は、調査対象に関して、既に信頼に足る校訂本が出版されていた既刊シリーズ I〜III とは事情を異にしており、本書の第一の特色になっていると思います。

本書で採録した定義的用例を伴う用語は次の 2 つのまとまりから成り立っています。

(1)「本地分」の「五識身相応地」「意地」「有尋有伺等三地」、並びに、「摂決択分」の「五識身相応地意地」「有尋有伺等三地」から回収される、五位百法に対応する用語

(2)「本地分」の「有尋有伺等三地」で個別解説（vibhaṅga）される、avidyā から jarāmaraṇa に至る十二支縁起を構成する用語

（1）五位百法に関連する『瑜伽師地論』の定義的用例については、既に、バウッダコーシャのシリーズ II『瑜伽行派の五位百法』の中で、参考情報としてサンスクリット原文を引用しています。本書で改めてそれを取り上げる主な意義は、上述のような既刊校訂本に関する文献学上の問題を、写本を中心に用いて解消することに加えて、新たに漢訳とチベット語訳を揃え、さらに、訂正テキストに基づく和訳を試みている点にあります。この点は、研究プロジェクトのニューズレター第 4 号（2015 年）の中で、高務君によって報告されている通りです。

（2）十二支縁起の項目語に関する現代語への訳語検討の試みは、平成 23 年度当初より取り組んでいた課題であり、班となってからも継続して来ました。『瑜伽師地論』に見られる訳語決定に有用な用例は、『縁起経』（*Pratītyasamutpādasūtra*、ただし、略称。例えば、ヴァスバンドゥは、*Pratītyasamutpādādi-vibhaṅganirdeśa* と呼ぶ。）で説かれる各用語に対する個別解説（vibhaṅga）を前提としており、『瑜伽師地論』「有尋有伺等三地」の中において、『縁起経』の経句としての個別解釈それぞれに対して、論書における固有の個別解説が加えられており、この個別解説をもって『瑜伽師地論』における定義的用例と見做すことができます。この定義的用例は、次のような脈絡において抽出することができるものです。すなわち、

〔縁起の 12 の用語に対する〕個別解説とは如何なるものか。経に「かつてについての無知」云々と詳細に説かれている。その〔『縁起経』の個別解説の〕中で、…（中略）…。
以上、これが『縁起の第一（avidyā に始まる順観）の個別解説』の個別解説であると見るべきである。（YBh 204.2–212.4）

本書では、こうした『縁起経』と『瑜伽師地論』との関係が明瞭となるような仕方で各用例を提示しています。ただし、『縁起経』に関しては、現存する複数のバージョンの中に、『瑜伽師地論』が直接基づいていると考えられるものが見出されないため、参考として、サンスクリットで現存する経典伝承の中で、公刊されており、利便性の高い既刊本を取り上げて、漢訳およびチベット語訳の対応するロケーションを併記することとしました。なお、サンスクリット写本を用いて「有尋有伺等三地」の既刊校訂本における問題を解消している点は（1）の場合と同じです。

本書の第二の特色として、以上のような 2 つの異なるテーマの許で、仏教用語の現代訳語を吟味検討するという作業過程を経た点が挙げられます。先行して着手していた十二支縁起の定義的用例と、班となってからの五位百法の定義的用例の調査を並行する過程

では、重複する vijñāna、sparśa、vedanā、jāti、avidyā の 5 つの用例を五位百法の訳語決定に有用な用例として組み入れ、テーマを一本化するという可能性も検討しましたが、本書のような二部構成のかたちを採ることが望ましいとの結論に至りました。

まず、縁起説は仏教の基本教説であり、そうした教説において、五位百法に見られる vijñāna などの 5 つの項目語も価値付けられている訳ですから、そこで、縁起観察のような基本教説の視点から仏教用語の現代基準訳語を考えてみることも有用なことであろうと思われます。十二支縁起の中の上記 5 つ以外は五位百法の体系から漏れますが、それらの用例についても既刊校訂本への訂正を行い、それに基づく和訳を試みています。その成果も含めることで、初期瑜伽行派の研究者だけでなく、重要な縁起説に関心を寄せる人々にも資するかたちになっていると考えています。また他方、本書の構成に関して、五位百法の体系に集約してしまうと次のような問題も生じるように思われました。すなわち、一連の文脈の中で解説される十二支縁起の定義的用例を分節し、文脈を持たない五位百法の体系の中に一部項目語の用例だけを個々に組み込むことでは、テキスト固有の脈絡における用語解説に込められた、本来の意図を見えづらくしてしまうだけでなく、かえって、採録した定義的用例とそれに基づく訳語決定の根拠が読者にとって分かりにくいものとなってしまう危険性を孕んでいる、と。

さらに言うならば、全体に渡る分析が容易でない『瑜伽師地論』の中で、特定の仏教用語の意味を深く理解するためには、既に述べた同論書の研究状況に鑑み、信頼できるテキストとともに個々の文脈が分かるような和訳を提供することが現段階では優先されるべきであろうと思われます。重要な仏教用語が同論書内のどの箇所において、どういった脈絡の下に説かれているかを、信頼に足る研究基盤としての原典を公表しながら、一方で、思索をくり返す作業が重要な足掛かりとなるように思われるのです。このような地道な取り組みを積み重ねた先にこそ、『瑜伽師地論』における個々の仏教用語の、より深い理解が可能になるものと信じています。そして、将来的には、同論書の体系に基づき、全体を網羅した定義的用例集の作成が望まれるでしょう。

ともあれ、こうした大きな目標を見据えつつ、班としての限られた活動期間において、瑜伽行派文献の定義的用例に基づき用語の現代訳語を検討するという中心課題のほか、長らく「五識身相応地」「意地」「有尋有伺等三地」の研究進展を阻んでいた問題の解消にも貢献したいという目的は、一応は果たし得たのでないかと考えています。とは言え、結果的に見れば、本書で直接扱うことができた調査対象としては五位百法対応語の数という点からも、また、厖大な『瑜伽師地論』の中の範囲という点からも一部に限られていることは認めざるを得ません。今後とも引き続き、研究成果を積み重ねることに努めたいと思います。同時に、本書が叩き台になることを一つの契機として、この分野の研究が発展することを願っています。

バウッダコーシャ V（Bibliotheca Indologica et Buddhologica 21）

『瑜伽師地論』における五位百法対応語ならびに十二支縁起項目語

—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—

編者：室寺義仁（代表）／高務祐輝／岡田英作

2017 年 3 月 15 日　山喜房佛書林

『『中観五蘊論』における五位七十五法対応語』の出版を終えて

宮崎 泉（京都大学文学研究科・教授）

平成 29 年 3 月、京都大学の研究者を中心とする本研究班の成果のひとつがようやく出版となった。これは本研究班が平成 23 年にプロジェクトに合流して以来、最もまとまった成果になる。この度 Newsletter にその成果を紹介させて頂く機会を得たので、これまでの Newsletter での報告や出版物の「はじめに」と重複するところも含め、改めて今回の成果の特長と本成果の完成までに苦労した点等をまとめておきたい。

さて、本研究班が分担するのは、中観派の論書に見られる定義的用例である。しかし、大乗仏教の一派である中観派は、あらゆる存在を勝義的な立場から否定することを専らとするため、中観論書に定義的用例を見出すことは概して難しい。そのため、今回の最初のまとまった成果は、中観論書の中でも例外的に定義的用例が出る『中観五蘊論』を取り上げ、定義的用例を収集し、それに基づく訳例を提示するものとなった。『中観五蘊論』は、チベット語訳のみ現存し、チベット大蔵経には「論疏部」（テンギュル、bsTan ’gyur）中の「中観部」（dBu ma）に収められる。今回は、その『中観五蘊論』に見られる定義的用例のうち、五位七十五法対応語のみを抽出し、関連研究とともにまとめた。『中観五蘊論』は、その論書の性格や著者性に問題が残り、また、サンスクリット原典が現存しない上に唯一残るチベット語訳にも問題が多く、扱いやすいとは言い難い論書である。しかしながら、編著者のひとり、アビダルマ仏教の範疇論を専門にする横山剛が、博士論文で『中観五蘊論』を扱おうとしており、その成果の一部を先に本研究班に提供してくれたこともあって、今回の成果を無事出版することができた。

『中観五蘊論』（*dBu ma phuṅ po lṅa pa*, **Madhyamaka-pañcaskandhaka*）は、後代の論書の中で言及される書名であり、本来は単に『五蘊論』（*Phuṅ po lṅa pa*, **Pañcaskandhaka* あるいは *Phuṅ po lṅa’i rab tu byed pa*, **Pañcaskandha-prakaraṇa*）と呼ばれていたらしい（横山 [2015]）。チベット大蔵経には『五蘊論』（*Phuṅ po lṅa’i rab tu byed pa*）と出ることが多いが、北京版チベット大蔵経の目録のように『中観五蘊論』という書名が現れることもある。また、インド撰述の著作では、アティシャ（Atiśa, Dīpaṃkaraśrījñāna とも, 982–1054）著『菩提道灯細注』（*Byaṅ chub lam gyi sgron ma’i dka’ ’grel*, **Bodhimārgadīpa-pañjikā*）やバヴィヤ（Bhavya）著と伝わる『中観宝灯論』（*dBu ma rin po che’i sgron ma*, **Madhyamakaratnapradīpa*）に『中観五蘊論』という書名が引かれる。両書ともチベット語訳しか現存しないため、チベット側の何らかの事情が書名の訳語に影響を与えた可能性も残るが、後述する『牟尼意趣荘厳』（*Munimatālaṃkāra*）に対する影響も含め、後代のインドで本書が中観論師の著作と理解され、重視されていたのは確かである。そこで、本研究班では、編著者の一人である横山剛の提案に従い、主にヴァスバンドゥ（世親）著『五蘊論』と区別する目的で、このチベット大蔵経論疏部「中観部」所収の『五蘊論』を『中観五蘊論』と呼んでいる。『中観五蘊論』はチャンドラキールティ（Candrakīrti, 月称）に帰されるが、チャンドラキールティには、『中論』に注釈を著した著名なチャンドラキールティ（600–650 年頃）の他、後期密教の時代に活躍し、密教者として重要な同名異人もおり、複数のチャンドラキールティが知られる。『中観五蘊論』の著者が『中論』注を著したチャンドラキールティと同一人物かどうかについては異論もあり（池田 [1985]、岸根 [2001]）、なお議論の余地が残る。

今回の成果では『中観五蘊論』の著者問題は扱えないため、『中観五蘊論』の著者が『中論』注釈者と同一人物かどうかという問題には立ち入っていない。けれども、10 世紀になると、インドでは『中観五蘊論』の著者は『中論』注釈者のチャンドラキールティと同一人物と考えられていたようであり、著者問題がどうあれ、『中観五蘊論』が後期インド仏教の時代に中観論師に対して一定の影響力を持っていたことは確かである。その意味では、今回の成果のように、チャンドラキールティ作と伝わる『五蘊論』を『中観五蘊論』と呼び、中観論書として取り上げることも許されよう。

今回の成果の特長として、中観論書における定義的用例を収集することを目的としながら、用例中の「参考文献」に時代の異なる中観論書だけでなく、系統の異なる説一切有部の論書『入阿毘達磨論』も取り上げたことや、既存のバウッダコーシャ・シリーズとの対応を各項目の冒頭に明示したことがまず挙げられる。また、『中観五蘊論』の和訳を提示するにあたって、サンスクリットの平行句があればできる限りそれを示したり、煩雑に見えるほど訳注を施したりしていることも、今回の成果の特長に数えられよう。これらは、主に『中観五蘊論』の内容やテキストの問題に起因するため、『中観五蘊論』を扱うとすればこうする他なかったとも言えるのであるが、結果として面白いものになった点もあると思われる。そこで、『中観五蘊論』の内容にも簡単に触れながら、本成果の特長をもう少し詳しく紹介しよう。

『中観五蘊論』の成立は、後代に絶大な影響力を持つ『倶舎論』より確実に時代が下がる。にも関わらず、『中観五蘊論』は『倶舎論』と共通の要素を持つばかりでなく、『入阿毘達磨論』を中心に『倶舎論』より古い説一切有部の伝統を受け継いでいたり、『宝行王正論』の心所説と一致する箇所があるなど、古い要素も含む。ここにまず『中観五蘊論』の独自性がある。そして、今回の成果では『中観五蘊論』から七十五法に対応する仏教用語を抜粋して利用したが、実際には『中観五蘊論』が五位七十五法の枠組みに従って法を解説しているわけではない。『中観五蘊論』の解説は五蘊を枠組みとし、そこに説かれる法は七十五を越える。しかし、シリーズ既刊との比較には七十五法がまず最も重要であり、それだけでも先行して出版する価値があると判断し、今回の成果ではその中から七十五法に対応する仏教用語だけを取り上げた。また、『中観五蘊論』の現存するチベット語訳テキストには問題が多く、しばしば明らかな誤りも含まれる。そのため、『中観五蘊論』を正確に読み解くには、『入阿毘達磨論』や『宝行王正論』といった先行する関連文献との比較や、その他できる限りサンスクリットで残る平行句を収集することが必要であった。

このような事情から、今回の成果では、七十五法対応語それぞれに対し、『中観五蘊論』の定義的用例の和訳とチベット語訳に加えて、「参考文献 (1)」『牟尼意趣荘厳』と「参考文献 (2)」『入阿毘達磨論』を掲げ、さらに和訳には、煩雑になるのをおそれず訳注を付した。参考文献にアバヤーカラグプタ（Abhayākaragupta, 11–12 世紀）著『牟尼意趣荘厳』を加えたのは、『牟尼意趣荘厳』と『中観五蘊論』のテキストに共通する所があることが既に指摘され（横山 [2014]）、『牟尼意趣荘厳』のサンスクリット原典が順次公開されている所であり（李・加納 [2015]）、しばしば『中観五蘊論』のサンスクリット原文を想定するのに有用であるからである。また、『牟尼意趣荘厳』よりも参考になるサンスクリット原典がある場合はそれも注に示している。『入阿毘達磨論』を参考文献に加えたのは、以前から指摘されている通り、『入阿毘達磨論』の心所法の構成や定義的用例が『中観五蘊論』とよく一致し（瓜生津 [1965]、池田 [1985]）、『中観五蘊論』の読解に際しても参考になることが多いからである。その上、『入阿毘達磨論』には研究の蓄積があり、チベット語訳からの和訳（櫻部 [1997]）の他、漢訳

からの英訳（Dhammajoti [2008]）並びに仏訳（Velthem [1977]）も存在するため、間接的に『中観五蘊論』の諸訳を見ることが出来ると言えるような状況も存在する。そこで、今回は『入阿毘達磨論』のチベット語訳、漢訳に加え、現代語諸訳も提示して既存の研究成果が利用しやすくなるよう配慮した。以上のような参考文献やその他のテキストに基づいて、『中観五蘊論』チベット語訳テキストに修正が必要な場合は、その根拠とともに訳注に示した。

また、バウッダコーシャ・シリーズの既刊を参照しやすくするために、七十五法対応語それぞれの冒頭に既刊の対応ページ数も示した。本成果は、後代の『牟尼意趣荘厳』や説一切有部の論書である『入阿毘達磨論』を用いたことによって、時代や系統の異なる定義的用例を一箇所にまとめることになり、関連する定義的用例が重層的になっている。特に、今回の成果は単なる中観論書の定義的用例集ではなく、シリーズ既刊に取り上げられていない説一切有部の別系統の『入阿毘達磨論』の定義的用例集にもなっているため、シリーズ既刊とも比較しやすくなるよう工夫をしたかったからである。これは既刊同士を比較する場合等、様々な場面で利用できると思われるので、ぜひ活用して頂ければ幸いである。

続いて、出版に向けた作業の中で特に苦労した点についてもまとめておこう。中でも、まず挙げなければならないのは、やはり『中観五蘊論』のチベット語訳テキスト自体の問題である。チベット語訳テキストと和訳をただそのまま並べただけでは、『中観五蘊論』のチベット語テキストと和訳の対応が分かりにくくなってしまうようなケースもあったほどであるが、前述のあらゆる工夫を凝らして出来る限り問題を解消できるよう努めた。チベット語訳テキストだけでは読みにくい場合もあると思われるが、問題があれば特に訳注に詳しく説明したつもりなので、不明な点があれば、まず訳注を参照されたい。本シリーズの性格からすれば、訳注を付すことで煩雑になるのは当然避けるべきであるが、これは『中観五蘊論』の現存資料の問題ということで、やむを得ずこのような形で進めた。

テキストについては、その他に、『中観五蘊論』からどれだけの範囲を本文として出すかが問題になることがあった。これは他の研究班でも生じた問題かと思われるが、厳密な意味では定義的用例でないものを、どの程度含めるかという問題である。本研究班では、原則として、訳例を検討する上で参考となるものは煩雑にならない範囲で全て出す方針で進めた。ただし、五根の用例（1〜5）のように、複数の項目にまたがる記述や、一つの項目に関する記述が離れた場所に出る場合もあり、それをどのように見せるかには他の方法もあったかもしれない。また、厳密には定義的用例でなくても、他の類似の項目との関係が述べられる等、それによって意味が限定できるような場合もあった。こういったものは他の定義的用例集と比較しても面白いと思われたので、そのまま本文に挙げ、さらに『中観五蘊論』中の別の項目が参照しやすくなるよう工夫した。典型的な例は「怒り」に関係する幾つかの項目である。例えば、krodha（41）は「心の怒り」（citta-prakopa）と定義されるが、その定義の中に、vihiṃsā（46）と pratigha（56）への言及があり、それぞれ「他者を拳や平手打ちなどで殴る原因」、「有情という対象への怒り」とされ、その両者を除いた単なる怒りが krodha（41）の定義となっている。この三者の関係は『倶舎論』にも出るけれども、『中観五蘊論』ではさらに pratigha（56）の定義の中にも krodha（41）への逆方向の言及があり、また、pratigha（56）が dveṣa と言い換えられる。dveṣa は七十五法に含まれないが、対立する法である adveṣa（29）はあり、adveṣa（29）の中にははっきりと pratigha（56）と対立する法であることが説かれている。今回の成果では、このような関係が追いやすくなるように、七十五法対応語全てに対し今ここに付したような通し番号を振り、定義的用例中に別の項目

や関連する項目が現れた時には、それを参照するよう指示している。

その他には、七十五法の枠組みで解説しているのではない『中観五蘊論』から七十五法対応語を抽出したことから生じる問題も残った。というのは、一つの項目に対し、違うレベルの複数の定義的用例が回収できる場合があったからである。例えば、前述の vihiṃsā（46）は、cetanā 等と並んで出る場合と随煩悩の下位要素として出る場合がある。今回の成果では、このような場合「定義的用例 1」「定義的用例 2」……のような形で全ての定義的用例を出すことにした。今挙げた vihiṃsā（46）は二つの定義にそれほど大きな違いはないけれども、māna（57）の場合は、「慢」一般と「七慢」の第一の「慢」の両方の定義があり、明らかに階層が異なるため、定義も大きく異なっている。ここでは慢についてこれ以上説明しないが、今回の成果では māna（57）にも両方の定義を出しているので、それを参照されたい。このように、二種の定義的用例が見付かる場合は分かりやすいが、実は一つしか定義的用例がない場合も『中観五蘊論』では、どのような枠組みの中にある項目かを意識することが必要である。今回の成果では、その点を「『中観五蘊論』における諸法の体系」（pp. xxiv–xxv）に一覧を出しただけであり、あまり分かりやすい形にできていない。今後七十五法対応語以外の項目について検討を進め、その成果を出版することができたなら、特に行蘊の中の枠組みを見通すためにどのような工夫ができるか研究班の中で考えていきたい。

今後は、今回扱うことのできなかった七十五法対応語以外から、定義的用例が回収可能なものを対象に、同様の作業を続けていく予定である。今回の成果でうまくいっていることも多いため、基本的な方向性は今回の成果を踏襲し、さらに徹底していくことになるであろう。しかしながら、これからは五位七十五法にしばられないので、項目の順序や階層を『中観五蘊論』に合わせる等、『中観五蘊論』の性格がより見えるような形にまとめることも検討していきたい。紙数が許せば、今回の成果に既に取り上げた項目についても、『中観五蘊論』の中の位置付けが明らかになるよう工夫し、その点を補足したいと思う。

以上のように、今回出版した成果を紹介する機会を頂けたので、この時点で気付いたこと、感じていたことを記録に留める目的で思い付くままにまとめたが、少しでも他の研究班にも資する所があることを願う。また、最後になったが、今回の成果は、多くの人のご助力があってどうにか出版することができた。出版物には全ての人の名前を挙げられなかったが、この場を借りて改めて関係して下さった全ての方に謝意を表したい。

*参考文献は省略。用例集本体を参照されたい。

バウッダコーシャ IV（Bibliotheca Indologica et Buddhologica 20）

『中観五蘊論』における五位七十五法対応語

—仏教用語の現代基準訳語集および定義的用例集—

編者：宮崎泉（代表）／横山剛／岡田英作／高務祐輝／林玄海

2017 年 3 月 15 日　山喜房佛書林

❖ 研究ノート

翻訳チベット語文献の読み方

—『仏随念注』を例として—

堀内 俊郎

（ハンブルク大学客員研究員（BDK Fellow）・非常勤講師、東洋大学東洋学研究所客員研究員）

はじめに

翻訳チベット語文献、すなわち、元はサンスクリットで書かれたものがチベット語に翻訳された文献が、数多く存する。そのなかには、サンスクリット原典が失われ、そのすべてもしくは大部分がチベット語訳としてのみ残るものも多い。たとえば、『仏随念』『法随念』『僧随念』（それぞれ D No. 279, P No. 945; D No. 280, P No. 946; D No. 281, P No. 947）という文献がある。仏・法・僧の三宝に対する随念を説くものである。それらに関連して（「それらに対する注釈」と言うことは保留しておく）、無着作とされる『仏随念注（-vṛtti, ’grel pa）』（以下、『注』。D No. 3982, P No. 5482、『法随念注』（D No. 3983, P No. 5483）、『僧随念釈（-vyākhyā, bshad pa）』（D No. 3984, P No. 5484）という文献がある。そのなかの『仏随念注』に対しては、世親作とされる『仏随念広注（-ṭīkā, rgya cher ’grel pa）』（以下、『広注』。D No. 3987, P No. 5487）という文献がある。上記の『仏随念〔経〕』は前半部に「如来十号」を列挙し、後半部には如来の 36 の徳を列挙する。『注』は前半部の「如来十号」を解釈したものであり、『広注』は前半と後半の両方に対する注釈である。以上の文献は、すべて、チベット語訳としてのみ残る。さらに、「如来十号」もしくは如来の諸称号を解釈し、それらと密接な関連を有するものとして、周知の通り、『釈軌論』『決定義経注』（AVSN）、Abhisamayālaṃkārālokā (AAA)という文献がある。

チベット語訳としてのみ残るこれらの文献は、確かに難解である。筆者は『釈軌論』との関連で 10 年以上前からそれらの文献に着目していたが、最近になってようやく読解の目途が付いた。そのなか、『注』（『法随念注』・『僧随念釈』も同様であるが）は、とりわけ、チベット語訳がよくない。直截に言えば、まずい。どうまずいかは以下の例から知られよう。ただ、だからといっていい加減に読んでよいということにはならない。むしろ、この文献は、明確な方法論、自覚的な態度をもって読めば、明瞭に読解することが可能である。それを具体例でもって示し、あわせてこの種の文献に対する読解の一般的な方法論を提示したい。

読み方

紙幅の都合で全体を提示できないが、細かい語句の異同はあるものの、まず、周知の通り、上記 4 書（『注』『広注』, AVSN, AAA）は、構成の点や字句の説明などで類似していることを確認しておきたい。そのうち、『注』『広注』、AVSN は、当該箇所の冒頭もしくは最初の部分で、世尊・如来・阿羅漢などと続くいわゆる「如来十号」のうちの「世尊」以下の 9 つが、要するに何を説いたものであるかを、6 つの観点からまとめている（AAA には欠く。『釈軌論』では、第 2 章冒頭部。堀内［2016: 1–6］［2017］参照）。以下はそこに出る記述である。

AVSN, 241.4–5: [1] vibandhabhaṅgāc [2] chāstṛtvasampat (i)(ii) vaktṛtvapratipattṛtva-lakṣaṇā, [3] yena hetunā

［1］障礙の破壊に基づいて、［2］教師性の円満（śāstṛtvasampad）は、（i）説示者性と（ii）実践者性を特質とする〔。それに〕、［3］何によって、つまり〔どんな〕原因によって〔行き・到達し〕[1]、

『広注』(D15b5–6, P71b2)：[1] bgegs bcom pa dang/ [2] ston pa nyid phun sum tshogs pa (i) gsung ba nyid dang/ (ii) sgrub pa nyid kyi mtshan nyid dang/ [3] rgyu gang yin pa dang/

『注』（D12a1–2, P14a6–7）：[1] ’ching ba gcod par mdzad pas [2] ston pa phun sum tshogs par (i) bstan to// (ii) rtogs pa’i mtshan nyid ston pa’i phyir te/ [3] gang gi rgyus zhe na/

6 つの観点のうち 3 つのみを提示したが、「如来十号」のうちの「世尊」が［1］に、「如来・阿羅漢・正等覚」が［2］に、「善逝」が［3］に対応する。そして、続く本文では、たとえば、〔教師（教主、大師、師）性円満への〕障礙を破壊した（bhagna-vān、過去能動分詞）のが「世尊（bhaga-vān）」である、などという解釈（ここでは語源解釈）が、個別的に、また詳細に、なされる。

・例：1-1

まず［2］に着目したい。AVSN と『広注』はほぼ一致している。他方、『注』を直訳すれば、「教師性の円満を説く。理解の特質（/理解を特質とするもの）を説くためである」となり、かなり異なっている。では、『注』のみの独自の理解があると見るべきであるかというと、そうではない。なぜなら、この同じ『注』において、後でこの対応句が説明される際には、

D12a5, P14b2–3: ston pa phun sum tshogs pa de yang rnam pa gnyis te/ (i) ston pa’i mtshan nyid dang/ (ii) thugs su chud pa’i mtshan nyid do//

「その教師性の円満はさらに 2 種類である。すなわち、（i）説示者性を特質とするものと（ii）実践者性を特質とするものである」

とあるからである。これは（1）その直後に続く詳細な説明に内容的に一致し、（2）上記の関連文献とも一致する[2]ので、冒頭の箇所もこちらに沿って理解すべきである。もしそうではなく上記の直訳を採る場合には、この箇所に見られる個別的説明との食い違いの説明が必要となろう。著者（無着という必要はないので著者とのみ書いておく）は混乱・錯乱していたのであろうか？あるいは同じ著作内部で書き手が異なっていたのであろうか？（以上は皮肉である。念のため。）

ここでの基準を明確化しておくと、まず、内容・文脈からの判断や、同じ文献内での記述との整合性というのが第一のポイントとして挙げられる（［基準 1］。さらに前者を［基準 1-1］、後者を［基準 1-2］としておこう）。また、関連文献との比較（［基準 2］）が第二のポイントであるが、それについて点と線のたとえで示してみよう。AVSN が 1 つの点である。それと密接に関連する文献として、『広注』がある。もう 1 つの点である。後者は前者のチベット語訳ではないかと見まがうほど、一致する場合が多いのである。とすれば、2 つの点と点によって、「線」ができる（なお、

[1] AVSN で如来の称号（厳密には「仏証浄」）が解釈される箇所の最後部では、それまでの一連の解釈についての「要義」が偈頌の形で出ている（AVSN, 247.6–7）。この箇所はそのなかの yena に対する解釈となっていると見て、このように訳した。〔〕内の補いもそれに基づいたもの。詳細は別稿を期す。

[2] AVSN, 242.4: sā ca śāstṛtvasampad dvividhā | (i) vaktṛtvalakṣaṇā (ii) pratipattṛtvalakṣaṇā ca |
『広注』D56a2, P69b6–7: ston pa nyid phun sum tshogs pa de yang rnam pa gnyis te/ (i) gsung ba nyid kyi mtshan (mtshan] em.; rgyu mtshan DP) nyid dang/ (ii) sgrub pa nyid kyi mtshan nyid do//

それぞれの点自体も確固不動のものではない)。そこで、『注』も、チベット語訳に問題があるとはいえ、その「線」にそぐう形で読めば、明快な読解が可能な文献である。むろん、3 書は異なった文献であることに注意することは大前提である。また、3 書の記述が明確に異なっている箇所も確かに存する。判断はケース・バイ・ケースである。だが、『注』に対する『広注』という関係、さらには、字句がほとんど一致する AVSN という文献もあることから、この線を 1 つの基本線として理解すべきと考える。さらに、これを補強するものとして、チベット語翻訳者の相違を指摘しておきたい。すなわち、『注』の翻訳者は Ajitaśrībhadra, Śākya 'od であり、『広注』のそれは Dānaśīla, dPal brtsegs rakṣita と、異なっているのである。もし両書の翻訳者が同一であれば、その両書の記述が異なっていた場合、それは見ていた原典の相違に由来するという可能性が高くなる。しかし、翻訳者が異なっているのであるから、記述の相違は原典の相違ではなく翻訳者の翻訳の仕方や技量の違いに由来するという可能性が出てくるのであり、かつ、そう想定することで翻訳に問題のある『注』の内容理解が可能になり、また内容上の見かけの相違も簡単に解消するというケースが多く見られるのである。

あるいは人あって、チベット語訳テクストに基づいて、すなわち具体的には代表的な版本である北京版（P）とデルゲ版（D）に基づいて読解すべきだという意見があるかもしれない。しかし、そういう場合でも、この箇所については P ではなく D を採り、この箇所については逆に D ではなく P を採り、あるいは P と D のいずれでもない読みを採用すべきだという箇所が必ず出てくるはずである。その際の判断基準は何かというと、原本・原典の想定、抽象的に言えば、「著者の意図」だということに思い至るであろう。そこに至る方法論が、自覚的であるにせよないにせよ、上記の 2 点である。すなわち、著者の意図を校訂者が判断・推定した結果（それは全くの誤解であるかもしれないが)、P と D のいずれを採るか、あるいは採らないかという判断がなされるのであって、純粋に、もしくは単純に、P と D に基づいた校訂というのは成り立たないのである。この点は翻訳チベット語文献を扱う者が忘れがちであるので、自戒したいところである（もしどうしてもチベット語の文脈で読むというのであれば、ある 1 つの版（P なり D なり）にのみ基づいて読解するというのは、それはそれで 1 つの一貫した方法である。それによれば、P もしくは D の版本の作者が理解して翻訳した限りでのテクストや読解が提示されることになる。ただ、それにどれだけの意味があるかは疑問であるが [3])。また、サンスクリット原語を想定してみるというのも 1 つの試金石となろう [4]。なお、これはチベット語訳の価値を損うものではなくむしろ高めるものである。サンスクリット原典が校訂本の形で存在していたとしても、それはいくつかの写本に基づいて校訂者によって構成された読みであって、新しい写本あるいは既知の写本の再読解によって読み直す必要があるものが多い。また、時には写本にない読みを採用する必要のある場合もあろう。テクストを読むということはそういうことであり、先に、「点自体も確固不動のものではない」と述べたのはこの意味である。他方、チベット語訳も、慎重に扱え

[3] その場合テクスト校訂ということも成り立たず、P もしくは D の diplomatic edition を提示することとなろう。正確なものであれば、それはそれで中途半端な翻訳研究よりもよほど有益であるが。また、当該チベット語訳文献に基づいて、後代のチベットの学僧がいかに原意と異なった解釈を施したか、ということであれば、興味深い研究となる。その際も、「当該のチベット語訳の原意」はこうなのだが、それがそのチベット語訳でこのように違って（この際には“間”違ってと言うのは言い過ぎであろう）理解された、と、そのチベット語訳から推定される原文・原意を示したうえで、相違を提示する必要があるが。

[4] 訳していて、日本語としておかしい、あるいはサンスクリット原語が想定できない、という場合、自分の理解が誤っているのではないかと疑ってみる態度が必要であろう。

ばそれを手がかりとして著者の意図にまで遡りうる可能性があるという点ではサンスクリット写本と類同の価値があると言っても過言ではないのである。

さて、まずいと言われている『注』のチベット語訳だが、まず［2］について、最低限の修正により修正・補正が可能である（{}は削除、<>は補い。なお、これはあくまでも『注』の翻訳の特徴を描き出すための試みであって、『注』のテクストを提示する際にはPとDで校訂したものを提示し、適宜その直訳を示したり、推定される原文を注記したりしてゆくというより他なかろう[5]。）。

Cf. AVSN, [2] chāstṛtvasampat (i)(ii) vaktṛtvapratipattṛtvalakṣaṇā
原文：ston pa phun sum tshogs par (i) bstan to// (ii) rtogs pa'i mtshan nyid ston pa'i phyir te
修正：ston pa phun sum tshogs pa{r} (i) bstan {to//} <pa dang> (ii) rtogs pa'i mtshan nyid {ston pa'i phyir te}

ここで、『注』のチベット語訳の「まずさ」の原因を具体的に分析してみたい。まずいまずいといっても始まらない。その原因を正確につかみ、それに沿った対処法を見いだすことが必要であろう。すると、以下の2つの「まずさ」（以下ではより客観的に「特徴」と呼んでおこう）が浮かび上がってくる。すなわち、［特徴1］構文（とくに格助詞）理解の誤り、［特徴2］単語の翻訳の不備・不整合という2点である。

［特徴1］については、{}で削除したように、「par」と、後の語に続くような形にしたり、「to//」として文章を区切ってしまったり、「pa'i phyir te」と、理由句であるかのような理解をしてしまったり、ということである（ston（説く）という語を削除するのは大胆な改訂であるが妥当であろう。あるいはこれが(i)に相当するかもしれないが、いずれにせよ内容上bstanとstonの2つは不要であるから）。ここで、［特徴1］をさらに細分化し、格助詞の補い過ぎを［特徴1-1］、省き過ぎを［特徴1-2］としておこう。なお、後者は『広注』の方により多く見られるが、頻度は少ないものの、『注』にも見られる。また、［特徴2］については、(ii)の箇所にrtogs pa'i mtshan nyidとあるが、後で個別的説明がなされる際には、(ii) thugs su chud pa'i mtshan nyidとある。両方とも想定される原語は*pratipattṛtva-lakṣaṇāであるので、同じ文献内で訳語にブレがあるのは不適切。これが『注』のチベット語訳がまずい第2の理由である（［特徴2-2］としておこう。［特徴2-1］は後述。）。一般化すれば語彙力の問題（ここでは訳語の非一貫性（［特徴2-2a］としておこう）であるが、他の箇所では語彙の貧困の現象も見られ

[5] 筆者は現在、『仏随念注』『仏随念広注』『法随念注』『僧随念注』の翻訳研究を準備している。その際、AVSNの記述は、『仏随念注』のみならず、『法随念注』『僧随念注』とも、ぴったり一致する（類似や対応というレベルではなく、AVSN対応箇所のタネ本が、その三書である。文を省きつつ引用したり、わずかに単語を補っている箇所もあるが）。そこで、たとえば仏随念関係の訳注に際しては、以下のように準備している。まずAVSNの原文を適宜分節して挙げる。その和訳を挙げる。その下に、『仏随念注』『仏随念広注』について、PとDに基づいた校訂テクストを掲載する。その後に、その両翻訳の文献批判を行う。すなわち、両書の翻訳がAVSNの記述とかけ離れている場合には適宜その直訳を提示し、それを本稿で述べた2つの［基準］と3つの［特徴］に照らして、その相違が両書の見ていた原文の相違に由来するのか、あるいは翻訳や伝承（詳細は訳注研究にて個別的に述べるが、この一連の文献は翻訳自体もまずいが、さらに、その後、チベット語訳の伝承の過程でもいくつかの損壊を被ったようである。［特徴3］）に起因する相違であるか、慎重に吟味する、というようにである。おおよそ本稿で一例を挙げたような形で準備しているが、本稿で挙げた箇所はむしろ単純な部類に属するものであり、慎重で詳細な吟味を要する箇所も多い。そういう点では、これらの一連の文献は、AVSNと明瞭に相違する箇所を除いては、内容的にはAVSNと独立の資料的価値はほとんどないのであるが、チベット語翻訳論の素材としては貴重な資料となる。また、この作業により、AVSNの梵本のいくつかについても修正を加えることが可能となる。また、『法随念注』は訳者不明であるが、その訳者についても解明できるかどうか、乞うご期待。

る。すなわち、「梵本では異なっていると想定される語を訳し分けていない」ということである（［特徴 2-2b］）。）であり、どんな言語でも学習の初心者には思い当たる節があろう（本稿の脚注 6 も参照）。ちなみに『広注』には sgrub pa nyid kyi mtshan nyid とある。pratipat(/-tṛ)は理解でもあり実践でもあるので後者の意味でとれば sgrub pa でもよい。

以上の 2 つの「基準」と 2 つ「特徴」を念頭において、先に挙げた箇所の他の部分を吟味してみよう。

・例：1-2

AVSN: [1] vibandhabhaṅgāc

『広注』：[1] bgegs bcom pa dang/

『注』：[1] ’ching ba gcod par mdzad pas

AVSN が基準になる（［基準 2］）。『広注』は「～と（dang）」と並列で訳している（他の箇所についても同様）ため、サンスクリットとの対応の点からも、また、同一文献内での記述（［基準 1-2］。後で説明されるように、「障礙を破壊することによって」という文脈である）からも、不適切（［特徴 1-2］）。その点では『注』は「pas」（～によって）とあり、適切である。ただ、vibandha（障礙、obstruction）の訳について、『広注』は bgegs と適切。他方、『注』は’ching ba であり、これはたいていは「束縛、bondage」と訳される。しかし、これは内容の点（［基準 1-1］）から言っても（教師性円満への「障礙・妨げ」である天子魔（四魔の 1 つ）を破壊したのであり、釈尊は天子魔によって「束縛」されていたのではない）、単語の訳から言っても不適切である。これは、『注』の訳者が、語彙力の問題により、*vibandha を*bandha もしくは*nibandha と理解して訳した（後者の場合は訳者が見ていたサンスクリット写本の問題の可能性もある）と推定される（これを［特徴 2-1］としておこう）。

・例：1-3

AVSN: [3] yena hetunā

『広注』：[3] rgyu gang yin pa dang/

『注』：[3] gang gi rgyus zhe na/

ここで『広注』は AVSN に類似するが、ここでは『広注』がむしろ格関係無視の［特徴 1-2］に相当する。他方、『注』は「どんな原因によってかというと～」とある。具格は正しいが、チベット語のこの形は直後の文がそれに対する回答となることを予想するような問いの形である。これは文脈に合わない（［基準 1-1］）。というのも、これは「明行足」を説明した文であり、紙幅の都合で詳細は省くが、どんな原因によって「教師性の円満」に行ったのかという点を示したのが、「明行足」という語である、ということである（具体的には八聖道や三学がその原因であるという解釈が後になされる）。すなわち、これはこれで完結しており、その直後には「世間解」に対する説明（［4］）が続くので、本箇所［3］と続く［4］は問いと答えという関係にはないのである。［特徴 1-1］による間違いと見ておく（本稿の脚注 1 も参照）。

おわりに

以上の 2 つの「基準」と 2 つの「特徴」を整理しておこう。実は、［特徴 3］もあるのだが、本稿で扱う範囲では見られないので挙げなかった。［特徴 3］の具体例は、本稿脚注 2 に見られる（これは『広注』における例であるが）。そこには rgyu mtshan nyid という語が出ている。これは翻訳時には mtshan nyid であったのだが、のちに rgyu という語が誤って挿入されて現行の形になったというのが、同箇所に対する筆者の想定である。

・文献読解の一般的な「基準」

［基準 1］（内部的基準）

1-1：内容や文脈

1-2：同一文献内での関連箇所の参照（原文が同じと想定される語や文が同じテクストの違った箇所で別様に訳されている場合（たとえばある項目が最初に列挙

され、後に詳細に説明される場合など)、適宜比較検討して原意を探ることが必要)

［基準 2］(外部的基準)

2-1：定型句（あるいは教理的な常識に属すること）である場合、それにそぐう形で理解することが穏当

2-2：2-1 を除く、関連文献における記述の参照（なお、この［基準 2］は［基準 1］、特に 1-1 と相補関係にあることは言うまでもない）

・特に『注』の翻訳に見られる「特徴」

［特徴 1］(構文（特に格関係）理解の特徴)

1-1：格助詞を補い過ぎている（特に、理由句ではないところを理由句（pas, pa'i phyir）としている場合が多い。また、過剰な文の区切り（//）も含む）

1-2：格助詞を省き過ぎている（頻度は 1-1 より遙かに少なく、むしろ『広注』に頻出する。また過少な文の区切り（これは写本の段階での問題の可能性もある）も含む）

［特徴 2］(単語の理解・翻訳の特徴)

2-1：単語の翻訳が誤っている

2-1a：語根へのたどり間違いもしくは類似する語との混同（これは写本の段階での問題の可能性もある）

2-1b：意味のとり間違い

2-2：単語の翻訳が不整合である

2-2a：梵本では同一と想定される語を別の箇所では違って訳している

2-2b：梵本では異なっていると想定される語を訳し分けていない

［特徴 3］

このテクストは、翻訳されたのち、現行の形になるまでに、いくつかの損壊・変容を被った

さて、本稿でその一端を示したように、『注』は、以上の 2 つの「基準」と 3 つの「特徴」を念頭に置けば、他の箇所についてもほぼすべて、明快に読解可能な文献である。そして、この方法は、他の翻訳チベット語文献にも適用しうると信ずる。前者は、何も新しいことを述べたわけではない。ただ、その基準を明確に意識しておくことが必要である。後者も、文献ごとに異なるし、特徴の数も 2 つや 3 つには限らないであろう。ただ、扱う文献ごとに翻訳の仕方の傾向や特徴を見いだし、常にそれを自覚して臨むことが必要である。漢訳文献に対しては翻訳者に注意が払われるにもかかわらず、翻訳チベット語文献に対してはそのようになされず機械的に一律に扱われる傾向にあるというのは、この分野の一大欠陥であろう[6]。翻訳チベット語文献は、初等文法さえ終えればあとは大きな辞書と電子テクストやデータベースがあれば翻訳研究・訳注研究が自動的にできるというものではない。より一般的に言えば、翻訳は機械的な作業ではない。頭を働かせることが必要な、創造的な営為なのである。

Traduttore, traditore（翻訳者は裏切り者）と言われる。浅い意味（誤訳の戒め）、深い意味（翻訳の不可能性）の両方に取れる言葉である。浅い意味で言えば、『注』のチベット語訳者に対してはその非難は免れないかも

[6] ただ、今後そのような研究も進むことが期待されよう。Hahn（2016）は、冒頭に（p. 81）、「管見の限り、インドの諸テクストのチベット語への多重翻訳についての組織的な調査もしくは研究を、私自身も含めて、これまで誰も行ってこなかった（To the best of my knowledge, no one has so far made a systematic survey or study of multiple translations of Indian texts into Tibetan, myself included）」と述べ、「多重翻訳（multiple translations）」、すなわち、同一の（「同一の」というのはカッコ付きであるが）サンスクリットテクストが多重に、すなわち複数回、チベット語に翻訳された例を、いくつか取り上げて分析している。そして、結語として（p. 94）、
「このような多重翻訳を詳細に比較することによって、サンスクリットからチベット語への、あるいはチベット語から仮定されるサンスクリット原本へと戻る、一方通行の道はないのだということが明らかになる。両方の方向に〔複数の〕陥穽があるのだが、多重翻訳の事例研究は、少なくともそれらの（陥穽の）いくつかを回避することを手助けするかもしれない（A close comparison of such multiple

しれない[7]。ただ、諸資料が充実し、格段に恵まれた環境にある 21 世紀に生きる翻訳者、ましてや何をおいても正確を期すべき仏典翻訳者が同じ過ちを再現する必要はない。『注』についていえば、以上のような方法論もしくは態度でもってあたれば、そこに見られる過ち（あるいはより客観的には「陥穽」）の多くは回避しうる。『注』（やその周辺文献）は、そのような観点から、一から再検討すべき文献である。

AVSN: Arthaviniścayasūtranibandhana. *The Arthaviniścaya Sūtra and its Commentary (Nibandhana)*. N.H. Samtani ed., Patna: Kashi Prasad Jayaswal Research Institute, 1971.

Michael Hahn 2016: “Multiple Translations from Sanskrit into Tibetan,” *Cross-Cultural Transmission of Buddhist Texts: Theories and Practices of Translation*, ed., by Dorji Wangchuk, Indian and Tibetan Studies 5, Hamburg, 2016, Departmens of Indian and Tibetan Studies, Universität Hamburg.

堀内俊郎

［2016］『世親の阿含経解釈－『釈軌論』第 2 章訳註－』山喜房佛書林。

［2017］「『釈軌論』第 2 章における世親の阿含経解釈の特徴」『東洋学研究』54, 93–107（東洋大学東洋学研究所）（＊拙著に対する多少の修正と補遺を含みます。拙著も、その意味では、原典やその著者に対する浅い意味での「裏切り」を含んでいたであろう。

拙著に対する修正の追記：

p. 7 本文 22 行目、p. 8 本文 7, 12 行目：これ（世尊）以外の者たち→外教徒たち

p. 8 本文 2, 7 行目：上地（上の段階）→下地（下の段階））

translations reveals that there is neither a one-way road from Sanskrit to Tibetan nor from Tibetan back to the hypothetical Sanskrit original. There are pitfalls in both directions, but through case studies of multiple translations might help us to avoid at least some of them)」と結んでいる。

ちなみに、ハーン氏は同論文の最後では Avalokiteśvarastotra という文献に対する 3 つの多重翻訳（年代順に、T_1, T_2, T_3 という略号が当てられている。詳細は同論文を参照）を検討している。氏によればその 3 つは独立に、つまり後の翻訳が先行する翻訳を参照することなしに、翻訳されたのだという。そして、氏はその 3 翻訳のなかで“同一の”サンスクリット原語に対して全く異なった訳語が見られる例を 11 例挙げている（p.94）。その中、最古の翻訳である T_1 に sdug bsngal という訳語が含まれている以下の 3 例を引いておこう。

akṣuṇṇa- sdug bsngal mang ldan [!] T_1, skyo med T_2, bde blag T_3 **25**
avipanna- sdug bsngal med la T_1, phongs med T_2, rgud pa ma T_3 **9**
ārta- sdug bsngal dang bcas T_1, nyam thag T_2, gdung ba’i T_3 **9**

上記の 3 例を見るだけでも、“sdug bsngal とあるから*duḥkha と想定して「苦しみ」と訳しました”式の翻訳がいかに危険か、心胆を寒からしめるものがある。

[7] ただ、面白いことに、翻訳者の翻訳の仕方の傾向がわかってくると、ああ、お前さんはこれをこう訳したのだね、と明瞭に理解でき、またそれにつれてだんだんと翻訳者に対する愛着もわいてくる気がする。悪訳（古典に限るが）もまた立派な翻訳であり、読みようによっては、著者の意図、原典にたどるための貴重な手がかりなのである。

❖ 記事

H28 年度第 1 回研究会合
平成 28 年 9 月 17 日（土）14 時より、国際仏教学大学院大学 2 階・大講義室にて。

1. 研究代表者・斎藤明教授より、本プロジェクトの目的と計画、および研究組織について説明がなされた（詳細は「研究の概要と成果報告」参照）。
2. 各研究分担者より、関連研究の現状と計画について報告がなされた。
3. 各研究協力者より、研究発表がなされた。発表者と標題、および所属研究班は以下の通り（敬称略）。
・佐々木 亮（佐久間研究班）
「『唯識三十頌安慧釈』の術語と翻訳をめぐって」
・高務 祐輝・岡田 英作（室寺研究班）
「『瑜伽師地論』の心所説」
・横山 剛（宮崎研究班）
「『中観五蘊論』の思想的背景をめぐって」
・斎藤 明
「『宝性論』の tathāgata-garbha 解釈考」
4. 上の発表に関して、討論と総括が行われた。

H28 年度第 2 回研究会合
平成 29 年 3 月 11 日（土）14 時より、国際仏教学大学院大学 2 階・大講義室にて。

1. 研究代表者・斎藤明教授より、今年度の研究実績と成果刊行について報告がなされた。
2. 各研究分担者より、各研究班における今年度の研究実績、次年度以降の研究計画について説明がなされた。
3. 研究代表者より、次年度の研究組織について説明がなされた。
4. 各研究協力者より、研究発表がなされた。発表者と標題、および所属研究班は以下の通り（敬称略）。
・名和 隆乾（榎本研究班）
「パーリ聖典における cha- Xkāya-について」
・堀内 俊郎（斎藤研究班）
「「如来十号」解釈の一展開：『釈軌論』とその周辺」
・横山 剛（宮崎研究班）
「『中観五蘊論』に説かれる五位七十五法以外の諸法：その定義的用例と思想的な背景をめぐって」
・石田 尚敬
「モークシャーカラグプタ著『タルカバーシャー』に基づく仏教論理学派の語彙について」
5. 上の発表に関して、討論と総括が行われた。

Bauddhakośa Newsletter 第 6 号（2017 年 7 月 24 日発行）

発行元：Bauddhakośa プロジェクト（The Development of Bauddhakośa: A Treasury of Buddhist Terms and Illustrative Sentences【Grant-in-Aid for Scientific Research (A)】）

〒112-0003
東京都文京区春日 2-8-9
国際仏教学大学院大学
斉藤科研費研究室
Email: office.bauddhakosha@gmail.com

印刷　株式会社サンワ

Bauddhakośa プロジェクトの研究成果は、以下の URL よりご覧いただけます。
http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~b_kosha/start_index.html